

# 仏教と能

鎌田 東二

インドで生まれた仏教は中国や朝鮮半島を経由して、日本に入ってきて定着していく過程で大きく変容していった。その変容の一つの文化表現として能狂言がある。とくに能は、神仏習合の最たるもので、その意味で日本文化の根幹にある構造を代表しているともいえる。

世阿弥は『風姿花伝』の中で、能は「魔縁を退け、福祐を招く」「天下の御祈祷」であると強調している。煩惱や怨念のうずまくこの世界に立ち起こってくるさまざま「魔縁」をうちほらい、「福祐」を招き寄せて、それを見るひとびとを「寿福増長・諸人快樂」に導く「天下の御祈祷」としての歌舞が能であると規定した。

そして、世阿弥が大成したといわれる複式夢幻能には、「天下の御祈祷」としての祈祷形式が、僧と霊との傾聴と成仏祈願として組み込まれた。まず、「諸国一見の僧」という回国行脚する修験者や祈禱師がワキとして登場し、回国の場所を示す。次に、その土地にゆかりのあるちよつと特異であやしげな前シテの人物が現れ、なにか因縁めいたことを告げる。そこで、不審に思った僧がその人物の素性を問いかけると、じつは、その人物は痛みや悲しみや怨恨を持った霊（後シテ）の化身であった。そこで、僧は心を凝らしてご祈祷の一夜をすごす。つまり、

怨念を持つ霊を呼び出して、その悲しみの声をしかと聴きとり、ご祈祷によって成仏させるという心的霊的変容の過程が表現されるのである。そのさまは、まさに鎮魂供養の儀式とも神秘詩劇ともいえるものだ。

ここでは、神々や霊たちの恨みつらみの声を傾聴する僧と、その僧が持つ仏教のご祈祷力が霊験あらたかなかたちで組み込まれている。そのような神仏協働、神仏習合する鎮魂供養の独自の演劇形式が能楽（申楽）として定立し、日本文化の精髓を世界に発信するものとなった。

世阿弥は、その能が、三つの起源を持つと述べている。一つは、神道の起源で、天の岩戸の前でのアメノウズメの神懸りの舞に端を発する。それが細男（せいの）に受けつがれ、やがて能になった。

二つめは、仏教的起源で、お釈迦様の説法の場面で騒ぎ立てた外道（異教徒）一万人を静める面白く滑稽なワザに端を発する。外道を後戸に連れて行って、弟子の阿難（あなん）の才覚と舍利弗（しゃりふ）の智慧と富楼那（ふろうな）の弁舌で六十六番の物真似をし、笛・鼓を打ち鳴らすと静まった。その間に、表では「如来供養」が示され、後戸では面白芸が披露された。この狂言綺語がもう一つの能の源流である。後で触れることにするが、能『大会』は、まさにこの能の仏教起源伝承と照合するような曲である。

三つめは、聖徳太子の時代の秦河勝とその子孫の村上天皇の時代の秦氏安に端を発する六十六番の舞である。内裏の紫宸殿でこれを行ったときに「天下治まり、国静か」になった。まさしくこれは天下太平の世となるためのワザである。その能・申楽の「申」は、聖徳太子が「神」という字の偏を除いて旁を残したものであると世阿弥は伝えている。

神道と仏教と秦氏。『風姿花伝』に記されたこの三重の起源譚の中に能の複雑さと幅と歴史の奥ふかさが見えてくる。

それではぬきさしならぬほどに深く能に食い込んできた仏教とはそもそもいかなるものなのか？

哲学者のニーチェによると、仏教は「心の衛生学（精神の健康術）」と呼ばれ、「ルサンチマン（怨恨感情）からの解放」を企図した「心理学」や「生理学」と評価されている。が、その着眼はけつして的外れではない。

たしかに、仏教は、「苦」の原因を煩惱としてとらえ、その基底をなす根源的無知や欲望である「無明」を「明」（智慧）に転換することによって解決しようとした高度な臨床心理学とか、瞑想を通じた精神療法という性質をもっているからだ。初期の仏典の『法句経（ダンマパダ）』には心の浄化法が次のように説かれている。「ものごとは、心にもとづき、心を主とし、心によってつくり出される。もし汚れた心で話したり行ったりするならば、苦しみはその人につき従う。一車を引く八牛の足跡に車輪がついて行くように。ものごとは、心にもとづき、心を主とし、心によってつくり出される。もし清らかな心で話したり行ったりするならば、福楽はその人につき従う。一影がそのからだから離れないように。（中略）実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない。怨みをすててこそ息む。これは永遠の真理であ

る」（『真理のことは』中村元訳、岩波文庫）。とすれば、ニーチェが「ルサンチマン」に冒されて消耗し、疲れ切った人間の病んだ心を開放せんとしたときに、東洋の果敢な精神の冒険者としてブツダを評価し、自分を「ヨーロッパのブツダ」にも見立てたのも理解できる。

しかし、残念ながら、ニーチェは悟りにいたることなく、怒りや憤懣や嫉妬などのさまざまな負の感情にさいなまれながら、狂気の晩年を過ごすことになった。もしニーチェに熟達したゲルがいて、修行に邁進していれば、彼の精神の病は発病していなかったかもしれないが、しかし同時に、『ツアラトウストラかく語りき』などに代表されるユニークで大胆でラディカルな哲学は世にあらわれていなかったことだろう。

そのようなニーチェの一面を、「失敗した仏教徒」と見立てるならば、さしずめ日本の仏教徒などはじつに多種多様な失敗を恐れず展開して、それらがそれぞれ立派な各宗派として多数の信奉者や追従者を有する教団にまで発達したのだから、ニーチェが日本に生まれていたら、ニーチェ仏教の宗祖としてけっこう成功していたかもしれない。冗談ではなく、ニーチェが多様な大乘仏教思想の海に投げ込まれていたら、力強く、また遠くまで大乘の海を泳ぎ渡ったであろう。そしてたいへんユニークな仏教宗派を定立したことだろう。あるいは能というルサンチマンの解放劇を目の当たりにしていれば、自身、喜んで能役者に身を投じていたかもしれない。

日本で花開いた大乘仏教や密教はそれほど奥が深く、自在である。なにしろ、成仏するのは人間だけでなく、「草木国土悉皆成仏」、つまり、草木も国土もみな成仏するとまで言い切るのだから。そしてそれが、能の「杜若」「六浦」などの曲のなかでくりかえし謡われるのだから。

しかし、いかにして「草木国土」が成仏できるのか？ その

根拠はどこにあるのか？ 仏教の創始者であるゴータマ・ブツダがもしこのような日本仏教の広がり方や思想展開、文化変容を知ったとすれば啞然とするのではないだろうか？

じつさい、日本では、「心病」を癒すワザとしての仏教は、じつに多様な展開を見せた。空海のこの身のままで成仏する「即身成仏」思想も、湯殿山の「即身仏」（穀断ちしてミイラと化したほとけ）や、「善人なほもて往生をとぐ。いはんや、悪人をや」という親鸞やその師の法然の「悪人正機」説も、法華一乗によつて「立正安国」を実現する日蓮の思想も、「一仏成道観見法界、草木国土悉皆成仏」と命題化した天台本覚思想も、見事なまでに自在で、八百万の神々ならぬ、八百万の仏たちを目の当たりにしているかのようなものである。

このような次第であるから、本来、煩惱やルサンチマンからの解放をめざした「心の衛生学」としての仏教には、当然のことながら、靈魂の存在や死後の生存など、霊的世界のことについては「無記」（答えない）という態度をとった仏陀の根本姿勢がつかぬかれている。しかしながら、それだけでは満足できないのが世俗の中で苦しんでいる多くのひとびとである。

彼らはわかりやすい物語を求め、心に残る神秘的な靈験や救済の奇跡を信じたくなる。そこで、輪廻転生（六道輪廻）から「解脱」し「涅槃寂靜」の透明境に入ることをめざした仏教に明白な他界観などはなかったにもかかわらず、やがて、死後世界の両極として地獄と極楽浄土という他界観が顕在化し、ここでの苦悩と救済の物語が積極的に説かれるようになっていく。こうして、本来的に認知心理学や臨床心理学的側面をもった仏教が、次第に地獄に落ちた罪人を救済するといった救済宗教の側面をもつものに変化するのである。

これは仏教が在地の宗教であるヒンドゥー教と習合しつつ救

済宗教的な性格を強めていくプロセスでもあり、彼の地の他界観や救済観が大胆かつ積極的に仏教内に取り込まれたものといえる。このとき、蓮の花の咲いた極楽浄土や閻魔大王（ヤーマ）が罪人を審判する役割を担うことも取り入れられた。いわば、仏教OS（オペレーティングシステム）のなかにヒンドゥー教ソフト（アプリケーション）が接続吸収された。このことは中国でも日本でもほぼ同様のことが起こる。つまり、仏教OSのなかに道教ソフトや神道ソフトが接続されたわけである。

なかでも、日本列島の民間信仰に支えられた神道ソフトは強靱で、仏が主で神が従である仏主神従の本地垂迹説が、いつの間にか、在地の神が主（根本）でインドの仏が従（花実）であるという反本地垂迹説（根本枝葉花実説、根っこが日本の神道で、枝葉が中国・震旦の儒教、そしてそこに咲く花実がインド・天竺の仏教で、それゆえに花実が根っここの国の日本に落ちてくる）東漸してくる必然があると説く考え方）として生まれきたのだ。この国では本末転倒のようなことがしばしば起こるのである。

しかも、大乘仏教や密教の多様な浄土観（薬師如来の東方瑠璃光浄土、釈迦如来の靈山浄土、大日如来の密厳浄土、観音菩薩の補陀落浄土など）のなかでも、とくに阿彌陀如来の西方極楽浄土がさかんに信仰され、それも十億土のはるか彼方にある西方極楽浄土に往生するのではなく、そこから紫雲にまたがった阿彌陀如来がやってきて、向こうのお山からお迎えしてくれるというようなじつに至近距離の「山越阿彌陀図」などが鎌倉時代以降には描かれるようになり、ついには、お浄土はすぐ近くのお山というような身近なものとなる。

そういう、こじんまりした島嶼列島である日本という風土のミニマムな形に一種縮小化された日本仏教のなかで、「草木国土悉皆成仏」とか、地獄からの救済とか種々の靈験などが説か

れるようになり、『日本靈異記』や『今昔物語』、『宇治拾遺物語』や『十訓抄』などの仏教説話集が多く物語られるようになり、『十訓抄』の仏教説話を題材に能「大会」が作曲された。

ここでは、お釈迦さまが説法した靈鷲山が比叡山として縮小再現されることになる。比叡山の麓の京都市左京区一乗寺に住み、これまで六六〇回ほど比叡山に徒歩で登拝している比叡山崇拜者の私からすればたいへんうれしいことではあるのだが、この至近距離感はいかにもちまいました日本様式に思えて、いささかイージーな感もある。

ところで、能「大会」の概要は次のような内容である。ワキの比叡山の僧のところに、前シテの山伏（天狗）が現れる。その山伏は、じつは子どもたちにいじめられていたところを僧に助けられた蔭で、変身してお礼に来たのだった。そしてこの山伏がお礼に望みをかなえてやると言ったので、僧は、それでは「釈尊靈鷲山にての御説法」を見てみたいと願ひ出た。山伏は望みは叶えるが、それはいわばヴァーチヤルな景色だから、それを見てもけっして「尊し」と思わぬように「返す返すも約諾」してくれよと念を押し消え去った。

そのうちに、不思議な音楽が虚空に鳴り響き、後シテである天狗の化けた「仏の声」が聞こえてくる。こうして、天狗たちが靈鷲山の説法の場の幻影を演じていくのだが、その様子は、「釈迦如来獅子の座に現れ給へば、普賢文殊、左右に居給へり、菩薩聖衆、雲霞の如く、砂の上には龍神八部、おのおの押し、圍繞せり、（中略）天人雲に、連なり微妙の音楽を奏す、如来肝心の法門を説き給ふ、げに有難き気色かな」という、まさしく靈山浄土のありさまだだったので、「僧正その時たちまちに、信心を起し、随喜の涙眼に浮かみ、一心に合掌し」て、約束を忘れて思わず「帰命頂礼大恩教主、釈迦如来と、恭敬礼拝」し

てしまったのである。

すると、すぐさま天よりツレの帝釈天が現れて、「かばかりの信者をなど驚かす」と怒り、信心深い僧を幻惑したと天狗を責め立てたので、「魔術」も破れて通力を失った天狗は、平謝りに謝りながら「深谷の岩洞」に逃げ込んでゆくのであった。このようないささか滑稽哀れを催すような狂言じみた曲ではあるが、冒頭では、いきなり天台教学の「五時八教」や天台密教の「遮那教主の秘蔵、五相成身」や天台本覚思想の基盤をなす「真如の慧日」とかの難しい教説が説かれ、「仏法」の有難みが強調されている。

原話となった『十訓抄』では、比叡山の僧は具体的に「西塔」の僧と記されている。しかし、「大会」の方では、そのことは省略されている。比叡山には、東塔、西塔、横川、無動寺という四つのゾーンができていくが、この僧は、『十訓抄』では、最澄の廟である浄土院などがある西塔に勤める僧であった。それに対して、「大会」では勤めのゾーンは不明であるが、僧の位階は「僧正」と高位の僧階が示されている。

「大会」が仏の世界、とりわけ靈山（靈鷲山）浄土が描かれるのに対して、狂言「朝比奈」では地獄が描かれる。と言いたるところだが、そのような単純なものでなく、地獄も極楽をもすべてを笑いとばしてしまうほどの剛毅で快活な笑劇が演じられるのである。

仏教が日本の民間信仰の世界に近づいていくことで、ここまですみ砕かれてしまうのは、驚くべき文化咀嚼力であり消化力ではなからうか。

（かまた　とうじ／哲学者・宗教学者、上智大学特任教授、京都大学名誉教授）